

サロン9条 第334回例会（2019.6.25）報告

テーマ：「新作絵本『いのちいただきます』に寄せて」

話題提供：堀野 慎吉さん（児童文学作家） 参加者 13名

最初に講師紹介にあたって、司会から「岐阜は児童文学の拠点としての歴史があり、1972年から約20年間にわたり県内を中心に発刊されていた児童文学雑誌『コボたち』の足跡は極めて重要で、今回の講師である堀野さんは、途絶えているこの雑誌『コボたち』の再刊に向けて活動されている」との紹介がありました。

堀野さんは現在70才で、新作絵本『いのちいただきます』は第8作目。この作品では、童心主義ではなく、「小さな生命を殺して食う」という残酷な話を通して、「いのちとは何か」を問い、「人間の成長過程で避けて通れない通過点」として、「いのちを考える少年の成長を描いた」とされました。

さらに堀野さんは、「いのちの根源的な意味」を、「いのちを食べて、いのちを生きること」「生きることが絶え間のないいのちの交換」と解釈され、この絵本の背景として「飽食の時代。食品ロスによる食物の大量廃棄。その一方で飢餓・災害・戦争」を挙げられました。

また、この絵本の刊行による県内での影響について、「読み聞かせや読書サークルからの問い合わせ」、「学校での活用」や「同世代や貧しい時代を知る世代からの共感」、「マスコミでの取り上げ」があったことを紹介されました。

加えて、子どもたちの感想として、「育てていたコッコを唐揚げにして食べたことには、いのちをいただいて、私たちは生きている」との思いを引き出してきているとのことでした。

ここで堀野さんは、この絵本を自ら朗読されました。以下、印象的な場面を拾います。

「祭りの出店で、小学生真二は『ピョッ』と友だちを呼ぶような声の一匹の青いひよこを買う。」
「世話係真二からのミミズで成長したコッコは、雄鶏でトサカが赤い勲章に見え、古い友達のようにじゃれ合った。」
「冬の朝、鶏小屋が荒らされ、コッコの羽根の片一方は、へし折られ、首から血のりがついている。」
「じいちゃん、コッコを助けて！」
「つらいかも知れんが、これから言うことを、よく聞けよ。」
「やめてくれ、じいちゃん。」
「真二に、もうひとつ、たのみがある。」
「これを、いただいてくれんか。」
「みんなで、コッコの大事な命をいただくかね。コッコもきっと喜ぶよ。（かあちゃんが、しみじみした声で言った。）」
「（じいちゃんは、胸の前で静かに手を合わせた。）」

この絵本、墨絵基調の俳画の師、和田文克さんの絵の効果もあり、40ページを超える作品の中で、田舎の小学生の生活風景が、リアルに描写されていることも情感がそそられました。

その後の参加者意見交流では、「食物を残すことは、他方で飢餓があることを思うと犯罪的では？」
「動物性を取らない菜食主義もある」
「宗教では、特に殺すなかれ-である」
「全ての動物の目的は、生きることであり、生きるためにいのちをいただく」
「今日の思いとして、生きものを殺す場合、唐揚げを見せることに意味があった。-現実を受け入れることで、ありがたくいただけるのではないか」
「絵も良く、動物の出生や死は、いのちの教材として子どもを育てている」
「児童文学は、子どもたちの感動と共に、哲学を感じ、身近さから世界にまで思いを馳せられるもの」
「動物の殺処分の行為は、自然の一部である人間が、それを自由に殺せる立場に立ったもので、その意味を問い、理解することが大切」
-など、多くの発言がありました。

最後に、堀野さんは、自然の中での活動を通して、「獣害と共存」「日本ミツバチと農薬問題」「アイヌの熊送りの儀」にも触れられたことでも、私たちにとって、いのちの継承の意味とそのいのちを育む自然が、身近なところで、そして地球規模で何が起きているのかを問い返す必要があることを提起されるものとなりました。